

余白は、上下 25mm、左右 20mm とする。また、行数は 46 行、1 行文字数は段組部分で 24 文字とする。また、表題（和文）は MS ゴシック 12pt、表題（英文）Times New Roman 12pt、氏名（所属）は MS 明朝 12pt とする。

名前は、名字 1 字 + 名前 2 字、あるいは、名字 2 字 + 名前 1 字の場合、全角空け、そのほかは半角空けとする。

考え方

学籍番号 5622047 松平 悠吾（環境ビジネス研究室）

1. 研究の背景と目的

2011 年に発生した東日本大震災から 14 年経過した。地震や津波に伴い福島原子力発電所事故が発生。その避難の形態は一様ではなく、国からの避難指示が出された「強制避難」と、自らの判断で自主的に避難した「自主避難」が存在する。「強制避難」に比べて、「自主避難」をした方には、政府からの資金的な援助をはじめとした社会的な助けが少なかった現状がある。また、自主避難者に関する論文は「母親」や「父親」、「支援者」に着目したものが多い。（論文 1）一方、子供視点に着目した論文は少ない。

加えて、移住を選択したものは非被災地において故郷の人や情報との分断による不安感や、非被災地の人たちの何不自由ない生活と自分たちが送る生活の比較からくる不快感に悩んでいたことが指摘されている。（論文 2）

本研究では、小中学生という多感な時期に東日本大震災を経験したという新たな視点に着目する。

震災の記憶が風化し社会的関心が薄れつつある 14 年経った現在、超長期的な視点での東日本大震災の「振り返り」を行い、公的支援が限られる中で、人間関係の困難などをいかにして乗り越えたか、その具体的なプロセスを解明する。

2. 研究の方法

千葉県内における、当時、義務教育を受けていた世代で「自主避難」を行った方を対象として半構造化インタビューを実施する。

対象者

- ・千葉県における避難者の生活再建支援拠点で「ちば市民活動・市民事業サポートクラブ」があり、2024 年の避難者が 1395 名存在する（論文 3）

- ・松戸市に東日本大震災の復興支援団体「黄色いハンカチ」が存在する

- ・自身の周りのネットワークで知りえる自主避難者

3. 予想される結果と考察

小学生の低学年世代は社会的コミュニティが形成されてから時間が浅いため環境に溶け込むのが容易なのではないか。一方中学生などの年齢が上がるほど環境に溶け込むのに苦労する。

被爆に対する偏見などはどのようなものがあるか。

どのような人との繋がりが困難を乗り越えるのに役立ったか。

4. 卒業研究Ⅱへの展望

半構造化インタビューを行う際に元となる質問項目を明確にする。インタビューを行う。そのうえで考察に結び付ける。

<参考文献>

1 東日本大震災後に発生した福島第一原発事故による自主避難に関する
課題 2025/7/17

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jniph/70/3/70_288/pdf-char/ja

2 非被災地における被災者支援の社会心理学的问题 2025/7/17

<file:///C:/Users/uzume/Downloads/KJ00007760360.pdf>

3 広域避難者に対する生活再建支援拠点事業の成果と課題 2025/7/17

file:///C:/Users/uzume/Downloads/BungakuKenkyukaKiyo_70_16.pdf